

# 琉球大学学術リポジトリ

## トマト栽培の要所

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-05-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮城, 滋 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/19593">http://hdl.handle.net/20.500.12000/19593</a>

# トマト栽培の要所

## 育苗の問題

トマトは花芽の分化が苗床で行れ、播種後大体廿五日位で本葉が四枚展開した頃に第一花房が分化して第二花房は六葉七枚の頃に行れるので、栽培に当つては良い苗をつくるということが大切な問題である。苗の良否が初期の着花、着果率、果実の肥大に非常に影響する。

高温、過湿、日照不足になると徒長するので高温期の育苗は出来るだけ風通しのよい場所に苗床を施けるがよい。又光に対しても鋭敏な作物であり、葉と葉とが重り合わぬように株間を十分に広げ充実した苗を作るように努めねばならない。若し極端に密植したまゝに放つておくと徒長して花芽の分化節位がすつと上り、分化しても発育が不良で落花、落蕾した花梗だけの花房になつてしまふ。早期の栽培は勿論、普通の栽培に於いても早い程草丈が高いので第一、二花房の収穫が全取量を上げるために大きく働く、高段の花房は病害発生が多く収量にあまり期待出来ないの収量に於いても一、二段が全収量の大半を占める。

トマトは発根が旺盛なので移植回数を多くする必要はない。移植を行うことによつて花芽の分化、発育が遅れるので、移植回数を多くすることはかへつて不利であり、大体一回移植を行う毎に五日位発育が遅れる。一回移植を行う時は播種後廿五日すると本葉が二、三枚であるので、四×四寸間隔に移植する。

## トマトの植付け

前にも述べたようにトマトは発根が旺盛な作物であり、植付けに際して枯れると言つては先づない。しかし枯れないからと云うので苗の取扱ひを乱暴に行つてはいけない。小さな

苗の作る養分で苗の発育、花芽の形成にも向けられるので植え痛みが起ると花が遅れるし、又落花、落蕾の原因ともなり、植付けの上手下手によつて初期収穫に大きくくひくことになるから植付け丁寧に行つて肝要である。尚、大きな苗種取扱ひに注意せねばいけない。

定植の日が決まれば前日の夕方は充分灌水しておく、苗取りは苗との間に両手を入れ大きく床土をつけて堀り取り、ぐつと力をいれて土のくずれない程度に握る。苗の大きい程鉢を大きくつけて取るように努め、後で床土が沢山残つて居るようではいけない。尚苗を堀り取つてから手をもちかえ鉢土を固く握りしめてはいけない。固く握ると植え痛みは少ないが、ダンゴの中から根がなかなか伸びないので発育が遅れ悪い結果となる。

花芽の分化節位は品種、育苗の条件等によつて異なり、第一花房は普通九―十一葉に分化しそれ以後は三葉おきに出る。三葉おきに出ると全花房が皆同じ方向に出ることになる。花房を外側に向けるか、内側に向けるように定植するかと言ふことは花芽が出現した大苗では困難な問題ではないが六葉六、七枚の苗では少々難しいので誘引の時に莖をねじり思つ方向に向けるとうい。花房をどこに向けるかと言ふことも問題で品種や気象その他の条件によつて決める。外へ向けることは薬剤が果実によくかゝること、果実が直接日光に当たるため多少早く熟する。但し高温期の栽培、ポンテローザのような比較耐葉の少ない品種では日焼け起りやすいので内側に向けるがよいでしょう。低温期には外側に向け早く熟させるようである。

## 栽植密度と整枝

畦巾三尺として、株間は品種、仕立法によつて異なる、仕立 株 間 反当所要本数

一本仕立 一尺一寸 三、〇〇〇本  
二本仕立 二尺 一、八〇〇本  
を標準とする。

一本仕立、主枝のみを残して側から出る芽は全部除いてしまふ  
二本仕立は第一花房の下から力の強い腋芽が出るからこれを副主枝として伸ばし、後から出る芽は摘除する。

副主枝の第一花房は主枝の第三花房に相当するので、一本仕立に対して二本仕立は収量が少くないことになる。即ち一本仕立を二尺株間、二本仕立を三尺株間とすれば、一本仕立を二本植える方は初期の収量が倍になるので有利である。除芽は出来得



(豊見城村上田区の宜保賢保氏のトマト園)

るだけ芽の小さいうちに手でかき取る。芽が大きく伸びてから鉋で切り取るか、手で摘み取るようでは、バイラスを伝播させるおそれがあるから注意を要す。

トマトにはポンテローザのように芯止りとなる品種があり、このような品種は芯が止る前に第一花房の下から出る側芽を伸ばして主枝にかえる。

## 施肥

トマトは肥料吸収力が比較的強い作物であり、又徒長しや

すいところから、窒素の多用はさげるべきものと考えられるが、小さい苗の時から花芽を形成して、花の發育と苗の發育が同時に進められるから、窒素を充分施して草勢の伸長を促すようにする。

磷酸は生育の初期に絶対に必要で開花結実を早める。これは大部分を元肥として堆肥と一緒に施すと有効である。加里は病害に対する低抗性を造り、品質をよくする。堆肥は相当量施すことがよく多く施用することによって、土じよの性質はもろろん尻腐れ病も軽減する。施す量が多い場合は半量は全面に切りこみ、残りの半量を植溝に施すとよい。全面施肥は施肥量が少ない時、短期作物である場合は初期の生育が遅れ不利になるが、肥料の量が多く相当長期發育するものでは全面施肥がよい。生育期間が長いから肥料切れを起すと花が止らないし、又、結果したもでも角張つた果実になつて充分肥大せず品質が非常に悪くなるので追肥回数を多くする。

施肥例を示すと、

	追肥			
	1回	2回	3回	4回
基肥	400 貫			
堆肥	14.5	5.	6.	5.5
安石加	30.	5.		6.0
堆肥	10			

### 品 種

あまり知られてはいないが、有望な品種を一、二紹介します。

#### 新豊玉二号

一代雜種で、早期収量がかなり上り、また早く發育するので、一定期間に高段までとれ、総収量も多い。窒素肥料が多すぎると、徒長し、又小肥にすぎると貧弱な花しかつけないので肥料の調節はむずかしい。しかし品質、特に色づきがよく、玉も手頃の大ききでよく摘み送り力もある。この品種は十二月頃播種の冬期栽培にもよい成績を収めるようです。

### 栗 原

や、晩生種で、果実は大型でよく摘み、極多収の品種である。腰が高すぎる、角はつた果実になりやすい欠点がある。ある程度多肥、小肥に耐えるが、窒素が多すぎると角はより果が出る果実は充分に大きくなって色づくので他の品種よりも遅い。着色が始まると急速に熟するので、収穫期を誤らないように注意する。

### 米 冠

松戸ポンテローザと栗原の二代雜種で栗原の欠点はなく一二段がかなり早く実り早期収量は多い。

### 病 虫 害

一、青枯病、普通根節より発病する。被害株は發育を中止し、萎凋を始め、次第に下葉より枯れる。被害株の根を切断すると維管束は褐色になり、導管から乳状の汁液を生ずる。

土じよ中に一年以上生ずるのでナス科以外の作物と輪作する。排水良好な場所に栽培する。移植は根を損せぬように丁寧に扱う。二、疫病、これは葉、果実を侵す恐しい病害である。葉は暗緑色の病斑を作り、又茎も暗緑色に染じて、著しい萎れを生じ、その部分から倒伏する。果実は成熟前の緑果に輪廓の不明な斑点を生じ暗黒色となる。

## ネズミとカタツムリ

子年に生まれた者は勤儉貯蓄の美德を備えているとか、又ネズミの柔和な口もとに似て子年生まれば常に口もとが可愛いかいわれている。

ネズミの語原は人が寝てから盜食するので寤盜呼ばれ、又夜寝ずにここぞばかりしているので、不寝身ともいわれており、大体この辺りから始まつたものであろう。性質は冷情で智

五、六年式小石ボルドウ液の撒布、窒素肥料の施用をさげ、磷酸加里肥を併用する。

三、尻腐病、幼果、成熟前の緑果に発病する。最初果実の頂部に花萼部を中心として、暗緑色の病斑を生じ、果実の發育にしたがい病斑部は凹む、これは土じよの水分關係によつて生ずるので、水分の急激な変化のある土じよ、地下水位の高い所で被害大きい。したがつてこれを防ぐには、適当な保水力のある土地を選ぶこと、堆肥の多用、灌水は乾湿に感して行う。

四、バイラス、いろいろの種類があつて、葉に黄色の斑入を生じ葉が小形となるもの、節間短縮して枝条をく生し犬狗果状となるもの等がある。

芽かきは脇芽の先端を持つて折り取る。あぶら虫がバイラスの病原をもち運ぶと言われているので、アブラ虫の駆除、作業中タバコを吸う人はタバコを吸つた手でトマトに触れないように注意する。バイラスと判定した場合、その株は芽かきをしないで全畑の芽かきを終えて後処理する。

五、ネマトーダ、線虫によるもので、加害植物の地表部は萎縮症状を呈し、根は白色不正形に膨大し虫えいを作る。

落花生等のような抵抗性の強い作物と輪作する。クロルピリンを三坪に一封度の割合で土じよ消毒を行う。

(宮 城 滋)

豊に富み、動作が軽快で技巧がうまい。前肢は物を握ることができ、耳目等の五感の發達が良く知覚は鋭敏である。逃走、水泳、直壁の上登もできる。ネズミは主として夜間活動して雑多

なものを食うことは誰しも承知のことであるが、最も重要なことは穀類、豆類を食うことである。人間の食うものはネズミも好んで食べるので、人間の住むところにはネズミも住む。然し